

文化事業とメディア～草間さんの一文を読んで

「江戸里神楽公演を新聞記事から振り返る～文化事業とメディア」（2016年12月28日）というタイトルの一文が2016年12月31日にウェブ《新着情報》にUPされました。

メディア（新聞）に実行委員会の活動が何であれ、掲載されることだけを願って来た公演開催当事者、つまりシニアスタッフ（連絡窓口担当）として、一読させてもらいましたが、「なるほど」と思うところが多い内容でした。

これまでの公演開催に関わる掲載記事を丹念に読み直していただき、そこから問題点を提示してくださったことに深く感謝申し上げます。

草間さんは、学生スタッフとして公演事業に携わっていただき、さらに就職されてからも公演会場にお越しいただき、公演の行く末を見守ってくださる稀有な元学生スタッフです。したがって、当事者としての目線と部外者としての目線が用意されており、資料として「新聞記事」を眺めていただき、論の運びと内容については、深く、そして説得性のある指摘だったと思っています。

チラシを配布して、人寄せに駆け回ってきた筆者にとって、記事はとて大きな広報ツールでした。リーチがもとより少なく、広報力が非常に弱い私たちにとって、新聞記事は大応援団でした。とにかく、さいたま芸術劇場小ホールであっても、神楽というコンテンツで、コンスタントに500席から600席を埋めるのは大変。記事一つで、一喜一憂でした。

神楽公演を有料開催するのですから、まさしく埼玉県内にあっては初期市場、そんな状況です。顧客分析（来場者の分析）とか顧客セグメントと分けとか、そんなことはどうでもよくて、ひたすら席を埋めていく作業の中で、記事そのものへの考察は眼中にありませんでした。

ただ、記事はおしなべてストレートニュースですから、シニアスタッフと学生スタッフが「協働」しての活動の新鮮さと難しさ、協賛会社の応援ぶり、出演団体の圧倒的なご協力ぶり、来場者獲得の困難性、提供される公演解説プログラムの体裁や内容などが話題になりづらく、確かに学生メインの紹介になっていることは承知しておりました。それは、シニアと学生とが一緒に取材されていれば、ちょっと違った記事内容になっていたと思っています。ですが、足並みを揃えることが難しく、学生スタッフが先頭に立って情報発信していくスタイルがしだいに固定されてしまった、とそんな反省点が生まれたところでした。

草間さんも記事の出自を提示されていますが、第八回公演（委員長・大園萌永さん・埼玉県立大学）に限っての記事掲載を改めて振り返りますと、以下の通りでした。

第八回公演関係記事一覧

- ①江戸里神楽公演ボランティア募集
(二〇一四年一月七日・埼玉新聞)
- ②企画準備で社会体験 埼玉県立大学の女子学生二人
(二〇一四年三月一〇日・埼玉新聞)
- ③まちの達人 日本の伝統芸能って、素晴らしい 伝統芸能公演の主催者として奮闘する

- (二〇一四年四月一日・東武朝日新聞)
- ④若い世代も見て 運営の学生PR
(二〇一四年五月二一日・埼玉新聞)
- ⑤「江戸里神楽」見てほしい 県立大学生ら実行委結成
(二〇一四年六月二日 東武よみうり新聞)
- ⑥日中の大学生が“江戸里神楽友好”中国語解説付き公演
(二〇一四年七月二八日・東武よみうり新聞)
- ⑦伝統芸能を次世代へ 神楽公演PR
(二〇一四年九月一二日・埼玉新聞)
- ⑧学生裏方で舞台支える
(二〇一四年九月一七日・東京新聞)
- ⑨日本の伝統芸能 次世代へつなげ
(二〇一四年九月二四日・産経新聞)
- ⑩学生が裏方あす神楽公演
(二〇一四年九月二五日・読売新聞)
- ⑪被災地で“神楽交流”埼玉一宮城
(二〇一四年一二月一日・東武よみうり新聞)
- ⑫県立大の学生らが宮城の被災地訪問
(二〇一四年一二月一七日・埼玉新聞)

じつに、12本ほどの記事が掲載されていたのです。これには、私も並べてみて、随分と記者さんに書いていただいたな、と後から思ったものでした。

第八回公演事業を進めていくにあたって、公演開催事業を成功させるための広報ではなく、事業の大きな柱と考え行動しました。手段としての広報ではなく、事業目的として広報を位置づけたわけです。

その結果、スタッフ募集から、広報活動がスタート、活動内容、公演告知、被災地神楽交流へ。活字メディアによって一連の活動経過がしっかり並んだと思ったしだいです。さらに、活動する学生スタッフの顔が見えるかたちで新聞に掲載してもらったことで結果的に「学生」実行委員会のイメージを伝えることができたと考えてきました。

地元紙（地方紙）である埼玉新聞記者さんに繰り返し情報提供をしてきた結果、事業の流れは埼玉新聞紙上でアピールできた経験から、地元の新聞・埼玉新聞の重要性があらためて認識できたことは、とても良いことでした。

第八回公演開催活動を担ってくださった学生スタッフの中心は、共立女子大学と埼玉県立大学の学生さんでした。そこで、埼玉県立大学が立地（越谷市）を考えて、埼玉県東部（東武）のブロック紙（朝日新聞、読売新聞に挟み込まれる。発行部数は一〇万部以上）により積極的に資料提供を行ない、取材をお願いした結果、トップページ、トップ記事、カラー掲載が実現しました。

ブロック紙記者が埼玉県立大学までお越しくださり、丁寧は取材を重ねてくださったことにより、相当な告知効果がありました。感謝しております。

読売新聞、産経新聞、東京新聞など全国紙（地方版）への資料提供は公演直前に集客効果を高めるために、直前に実施させてもらいました。共立女子大学の学生スタッフの事業説明が明快だったことも手伝って、各社に学生コメント

が取り上げられ、新聞記事の効果を直前の来場申し込み電話で確認したことを、今でも覚えています。爆発的でした。

広報を事業の柱として用意しながら、草間さんのご指摘の通り課題として、学生スタッフばかりが取り上げられており、シニアスタッフの扱いがなかった。同時に、神楽そのものの記事が掲載されなかった。したがって、出演協力団体に対する記事も極端に少なかったことが判明しました。記者へ資料提供しても、学生スタッフが出演団体の神楽を十分に説明できる「実力」を考えて、神楽を演じてくださる側の方々と同席取材をセットする方式も検討すべきでした。

事業の柱としての広報、その位置付けで出演団体（大宮住吉神楽保存会）の地元の行政紙・「広報さかど」には二回、掲載されたこと。テレビでは、テレビ埼玉で特集扱いのニュースとして、当日の様子が放映されたこと。ラジオでは、NHKさいたま放送局の FM 番組「日刊さいたまーず」で二〇分番組を構成していただき、共立女子大学の学生スタッフ一名が生放送に出演させていただいたことなど、第八回公演では多彩な公演広報の成果を獲得することができました。小規模な文化事業、ボランティア事業が世間という大きな海で、なんとか「存在感」を表出していくには、メディア空間という場にしかない、と思うことがしばしばありました。

ボランティアが担う神楽公演という文化事業が公共財となっていく道、灯りは見えていたのですが、結果的にうまく見つけることはできなかったわけです。

メディアへの積極的なアプローチを事業達成の手段とせず、事業の柱そのものと位置付けたアイデア、学生スタッフにとっては、取材される経験をする、よい機会に恵まれたと思えました。

その半面、草間さんの一文により広報資料を提供する側（つまり、実行委員会サイド）の目配りがさらに必要だという宿題を見つけることができました。記者さんに対して、話題提供するサイドとしては、もっと話題に工夫を凝らすべきでした。

「江戸里神楽公演、マスコミに登場！！」（114ページ～117ページ）という一文が玉井幹司さんにより、『第八回江戸里神楽公演解説プログラム』（2014年9月26日刊行）に掲載されています。記者取材の場をフィールドワーク風に眺めて書き込んだ一文です。この一文も示唆に富んでいます。

江戸里神楽公演学生実行委員会の活動は、神楽公演という「特別な場所」のためでしょうか、しばしばメディアに取り上げてもらっています。

筆者のように、その取り上げてもらったことに対して「ただただ喜ぶ」のではなく、「取り上げられかた」について言及していくこと、その姿勢の重要性を草間さんの一文、加えて玉井さんの一文の読み直し作業を通して、確認できました。第九回公演でも学生スタッフは積極的に活動中の出来事をさいたま市役所記者室へ出向いて、記者さんと会話し、世間に公開していこうと努めてきました。そのあたりの感想などは、いずれ学生スタッフに書き上げてもらい、発表してもらいたいな、と考えています。

草間さんの一文は刺激的でメディアへの取り組み姿勢をもう一度、考えていく必要性を指摘してもらいました。実行委員会の活動が公共財として、認知されないままの状態は、こちら側が発信する内容にも問題があったのかな、そん

な思いにいたりました。

文化事業（神楽公演開催）とメディアとの関係は①メディアに依存している「弱小」文化事業活動のシンドイ実情②メディアを活用しようとする文化事業団体サイドが提供する資料のレベル③ストレートニュースにより広報されていく内容と広報されていない内容、などを含めてもっと考えることがあったのだな、と思いました。

ただ、記事掲載本数は私たちと同じような、人集め型文化事業にあっては、死活的ですから、さらに記者さんに事業にかける多様な思いを伝えていくべきでしょう。そして記者さんの目線から描き出された私たち自身の姿についても再帰的な視点で考え直していくことが大切。そんなことを感じました。なお、第八回公演のメディア登場回数、もちろん素晴らしい成果を上げています。ただ、スタッフ全員が第八回公演広報活動レベルにはもう追いつけない。ピークアウトを実感しております。

なお、第九回公演の掲載記事については、取材を受けてきた学生スタッフ当事者からの発言があれば、いいですね。

シニアスタッフ・斉藤修平

（2017年2月25日）